

深イ～話！

No.114

——「養護学校教諭時代の忘れられない思い出」(歴史研究家 河合敦)——

僕は、日本史を深く勉強していくうちに、将来は日本史の研究者になりたいという夢ができました。それで一旦入学した大学を退学して、翌年、青山学院大学の史学科に入学しました。

4年後、東京都の教員採用試験に受かりました。日本史の先生は400人受けて合格者は10人、40倍の倍率を勝ち抜いたのです。

ところが、最初の赴任先は知的障がいを持った生徒が通う養護学校でした。日本史の授業はできず、簡単なお絵かきや算数の計算の授業をすることになりました。

せっかく学んだ日本史を教えられないという欲求不満もあったのですが、ある日、非常に感激した出来事があり、そのことを「NTT ふれあいトーク大賞」というエッセーの公募に投稿しました。

これが優秀賞を受賞したんです。僕が初めて受けもった子どもたちとの出来事です。

その日、子どもたち10人、担当の先生3人で、小田原に遠足に行きました。

お昼になり、昼食を食べるお店を探したのですが、どこも13人の団体は入れず、ようやくあるお蕎麦屋さんに入ることができました。

2階の座敷に通され、女性の店員さんが注文を取りに来ました。

ところがメニューに写真がありません。

子どもたちは言葉が喋れなかったり、字が読めなかったりするので、僕が一つひとつ説明していたら、その店員さんは忙しかったんでしょうね。

パイと下へ降りちゃったんです。僕はその態度にすごく腹が立ちました。

ようやく注文が決まり、別の店員さんに頼みました。

待っている間、僕たちは畳の座敷にそのまま座らされていたので、座布団はないかなと押し入れを開けたら、ありました。僕はそれを出して配り始めました。

そしたら最初の店員さんが血相を変えてやってきて、「これは使わないでください！」と私からひったくり、別の場所から持ってきた座布団を投げつけるような乱暴さで生徒たちに配り始めたのです。

さすがに僕はブチ切れて、一言言ってやろうと口を開きかけたその時、座布団を受け取った勇太(仮名)が「おばさん、ありがとう」と言ったんです。

そしたら、ほかの子どもたちもみんな「ありがとう」「ありがとう」と言い始め、言葉が出ない子は手を合わせて頭を下げたのです。

その光景を見た時、僕はもうグッときてしまいました。

すると、その店員さんは人が変わったように急に優しくなったんです。それまで忙しくて心に余裕がなかったんでしょうね。

13年後、勇太が亡くなったことを知らせるお母さんからの手紙が来ました。その中に、葬儀に参列された方のコラムが同封されていました。

その方は、13年前に僕が書いたエッセーのことに触れた後、こう綴っていました。

「……勇太が発した「ありがとう」の一言で、食堂の店員も河合先生も、その場にいた皆が、とても和やかな気分になったという。感動した。そうか、勇太はそんなこともしたのか、と。

そこに知的障がい者たちの素晴らしさを見た。

白木の棺の横に大書してあった『ありがとう』の意味もよくわかった。息を引き取る直前、何か言いたそうだったので、お母さんが『ありがとう、なの?』と聞いたら、勇太は頷いたそうだ。勇太は心から「ありがとう」と言える若者だったのだ」

それを読んで僕は涙が止まりませんでした。僕の書いたエッセーがずっと勇太と彼の家族の支えになっていたんです。

彼は30年という短い生涯を終えたわけですが、「ありがとう」という言葉は、これからも彼の家族を支えていくと思います。

